山脇学園中学校
２０２５年度　入学試験問題
国語１科入試

国　語

注　意　事　項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は60分間です。
3. 問題は一～二までです。
4. 解答はすべて解答用紙に書きなさい。解答らんの外に書かれたものは採点の対象としません。
5. 解答用紙に受験番号、氏名を書きなさい。
6. 字数指定のある問いは、句読点・記号も一字として数えます。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一汁一菜とは「汁飯香」、味噌汁とご飯と香の物（漬物）を言います。とりあえず、ご飯を炊いて、具のたくさん入った味噌汁さえ作れば、食事になるのです。味噌汁を具沢山にすることで、おかずの一品を兼ねます。野菜に油揚げや少しの肉を入れて具沢山にすることで、栄養的にも問題ありません。一日三食、毎日一汁一菜だっていいのです。

足らないという人はおかわりしてください。一汁一菜は飽きるどころか、いつも「おいしいなぁ」って言えるはずです。それは、人間が味付けしたものが何もないから。和食の原点である一汁一菜は自然の摂理の中にあって、山や花といった自然の風景に見飽きることがないのと同じです。

ただし、「味噌汁には何を入れてもいいのです」と伝えても、適当に考えてできる人は案外少ないと気づきました。私たちは、自分で発想してなにかを創ることが苦手になっているのかもしれません。それほど「こうでなくてはいけない」と信じ込まされてきたのかもしれません。豆腐やわかめ、大根に油揚げ、じゃがいもと玉ねぎ、といった、おおよそお決まりの味噌汁しか作っていなかったのです。これまで食べ慣れてきたもの以外の食材を入れるのは注1タブーでしょうか。トマトやピーマンを味噌汁の具にすることも、ソーセージや残り物のおかずのから揚げを具にすることも、そのたびに驚かれました。（中略）

焼き飯は強火が基本だとか、材料は切り揃えなければならないとか、豆は煮崩れてはいけないとか、私たちは何かに縛られてお料理をしてきたようです。そうした料理の決まり事の多くは注2ハレの日のために洗練されたプロの仕事です。ハレの日やプロの仕事が日常の暮らしに入りこんでしまったから料理が「面倒なもの」になったのです。そんな箍はすべて外せばいい。ハレの仕事は、普段の家事と区別するから意味がある。そうすれば日常のケの料理は、ずいぶん楽に、ごくシンプルになります。

（中略）

私が「一汁一菜でよいと a テイアンする」今も、①栄養学的には注3一汁三菜が奨励されているのは変わりありません。栄養学が科学であるなら、同じ基準でないと成立しないので、西洋で生まれた栄養学を和食に当てはめています。敗戦後は、西洋人に比べて随分劣っていた体力（体格）の向上をめざして、アメリカ式の栄養指導を取り入れ、タンパク質と油脂のエネルギーを中心に考える一汁三菜を基本としたのです。

A　和食にはメインディッシュなんてないのですが、以後は「お肉がいいか、魚がいいか」とメインディッシュから考え始めるようになりました。たとえば、和食で肉を使った代表例の肉じゃがは、肉料理か野菜料理か、考えてみてください。肉じゃがは、主菜（メインディッシュ）を兼ねた副菜、あるいは副菜を兼ねた主菜ということになります。魚以外の和食のタンパク質といえば、味噌汁の味噌と油揚げ、納豆や豆腐など大豆食品ですが、メインディッシュという感じはしないでしょう。和食であえてメインディッシュといえば、春の若竹煮や秋の土瓶蒸しのような季節を味わうものです。そうした情緒性を含んだ楽しみよりも、カロリーを優先にすれば肉が大事になる。バターや油を使った西洋料理や中華料理を取り入れざるを得なくなる。

B　、栄養学を進めれば和食文化が失われるのは当然のことなんです。その実践でオオ b ゼイが対象になれば、西も東も平等に均一化することになるのもまた当然で、食文化の多様性は後回しになっていきます。

これが雑食の始まりです。その上、国を挙げての国民の栄養向上政策の努力は実り、昭和50（1975）年ごろには、ご飯を中心とした日本型食

生活が完成したと喜ぶようになりました。しかし、それも束の間、外食の楽しみを知ると、一気に肉食が進み、油脂（エネルギー）の取り過ぎに偏り、生活習慣病、さらに注4メタボが表れ、現代に至ります。

食文化は不要なのでしょうか。おいしくて、栄養さえ取れればいいという考えもありますが、食文化とは自然と家族の命を守るものです。それなら、自然とつながる日本型の栄養学があるべきなのです。その実現はあまりに複雑で無理なことに思えるかもしれません。でも、これまでの時代の食事を思い出して普通に考え、一人一人の感性を働かせれば実現できます。人の健康を細部の化学的な数字で捉えようとせず、季節感と暮らしの健全の維持という大きな感受性を失わなければいいのです。そうすれば無理に健康を追いかけなくても、健康は後からついてくるのです。

（中略）

一汁一菜なんて同じことの繰り返し、と思われるかもしれませんが、基準は動かないから基準になるのです。基準が守られるから、小さな変化にも気づくのです。お味噌汁の一椀の中に、無限の変化を知ることができます。それが「有限の無限」です。違いに気づくことが感性です。同じ味噌汁は二度と作れません。季節は移ろい、おのずからおこる変化を捉えることは、感受性を磨く機会です。それは誰もが幸せになる技術です。暮らしは道、修業にもなるのです。

「何を食べたい？」と聞かれたなら、個人的なそのときどきの気分で、レストランでメニューを選ぶように返答すればいいと思います。 C 「何を料理するか」となれば、自分だけのことではなくなり、料理する人の思いは、「自然」と「他者」に向かいます。

料理をする人は、自然と人間、また、人間と人間の間に立って生まれる感情に、喜んだり苦しんだりしてきました。料理する人に依存している「食べる人」はそこがわからないので、無邪気に喜んだり腹を立てたりして、作る人の苦心には想像が及ばず、食べる人と作る人の関係はギクシャクしていきます。

ところで「人間は何を食べてきたか」を語った書籍は私の本棚にも何冊かあります。最近では、現代の頭脳と言われる経済学者で思想家のジャック・アタリがまさにそんな本を書いています。

けれど、それって男の権力や美食の歴史だから私にはつまらないのです。私は料理するという人間の行為そのものに興味があるのです。「人間は、何を思い、何を料理してきたのか」という料理する人の気持ちを深く考えて書かれた本は一冊もありません。日々の料理は単なる楽しみ、快楽（欲望）であると軽んじられ、なめられてきたのです。

私の仕事は料理研究です。フランス料理や日本料理の現場で修業した後、家庭料理の指導者という命を育む料理の仕事をしてきました。和食は何もしないことを最善とするといったことをすでに書きましたが、その思想は原初よりの人類の行為としての料理と一致して、お金を取ることはありません。家庭料理は無償の愛の行為だと言えるのです。お金を取れば家庭料理ではありません。ゆえに経済行為としてあるプロの料理に対して、家庭料理は純粋料理、原初の料理です。

この「家庭料理」という言葉は、プロの料理に対しての言葉ですから、原初の本来の意味を考えれば、「家庭」をつける必要はなく、シンプルに「料理」と言えばいいはずです。ですから、本来なら「家庭料理」などと言わずともよいのですが、②プロの料理と家庭料理は、その目的や条件を区別しないで語られることが多く、あえて「家庭料理」と呼んでいます。

違うことがわかっていれば、家庭料理と言わずともシンプルに「料理」

でよいのです。家庭料理こそが、純粋な料理の原点です。その料理を考えてわかったことは、栄養摂取、表層のおいしさ、腹を満たす快楽とコミュニケーションだけが、お料理の意味ではないということです。ですから、それを基準にすればさまざまな場で行なわれる料理の相違や意味が見えてくるのです。

これまでは、料理の意義は、食べる人の側に立って、食べる人の「栄養摂取」「楽しみ」「コミュニケーション」にあると言われてきました。もちろんそれだけでも、十分な意味があるでしょう。しかし、料理を「する」という行為には、それだけではない、どころかそれ以上の意味があるのです。

料理するとなれば、まず自然を見ることになります。そうすれば、自然が、今、何を食べるべきかを教えてくれることでしょう。振り返って、家族という食べる人を見れば、家族の体調や好み、いろいろなことを思って少し工夫するものです。それが料理の不思議なところで、注5オートマチックに食べる人のことを考えてしまいます。

だからこそ、料理する人と食べる人の関係は、愛情となり、信頼関係を生み、その両方を育みます。日々の暮らしにおける「作って食べる」という食事は、教育機能を持ち、学習機能をも持つことは疑いありません。そして、自然から生まれる料理はいつも変化していますから、自然の食材に同じものは二度とないのです。色の濃いもの薄いもの、味の濃いもの薄いもの、甘いもの、苦いもの、酸っぱいもの、と、同じものは二度とありません。

そんな食事から、私たちは無限の経験をしている（きた）のです。身体は、覚えようとしなくても無限の経験を記憶します。良い経験は心地よい経験として、それぞれの細胞単位で記憶するのかもしれません。それは頭で覚えるのとは違います。視覚、嗅覚、聴覚、触覚、味覚という感覚所与からの刺激を受けて、時にすばやく、時に時間をかけて蓄積された膨大な経験と結びます。これを「悟性」と言います。経験が生む知性として、この悟性が働いて、見えていないものさえ知ることができるのです。そうした感性は予測する能力にもなり、食事であれば、見ただけでもおいしいとわかってきます。この悟性によるイマジネーションを持って丁寧にものを見ることは、あらゆることに生かせる能力です。

違いがわかることを「 X 」と言います。小さな変化にも気づくことができる人がいます。その気づきを喜ぶ人を「もの喜びする人」と呼びます。もの喜びとは、小さなことにも気づいて喜ぶこと。ちょっとしたことに気づいて発見することがあると、嬉しくなります。（中略）

③地球と人間の間に料理があります。料理をすることは、地球を考えることです。この頃、魚を食べる度に海が気になります。地方に行けば、漁港や市場にいつも行きますが、どこに行っても魚が取れなくなった、いなくなったという話を聞くからです。いつまで魚が今の状態で食べられるのか、あるとき突然魚がいなくなって食べられなくならないかと思うと、心配になることもあります。

どうぞ料理をしてください。料理をすれば、地球を思うことができるでしょう。私たち人間は、もとはと言えば、みんなわずか０・２ミリの卵です。ずいぶん大きくなりましたね。しかし、どうして大きくなったのかといえば、この身体は全部、これまで自分が食べたもので大きくなったのです、というのは、注6養老孟司先生に聞いた話です。目の前にある食材は、私たちの身体の一部になるかもしれませんよ。だって、米がなくては生きていけないとしたら、家のそばの田んぼは私たちの一部だともいえるでしょう、と。だから、まさしく田畑は私たちの未来です。人間は自然の一部なんですね。忘れないでいてください。そう思っていると、「地球は自分」、

「自分は地球」だと思えてくるでしょう。争っている場合じゃありません。地球を傷つけることは自分を傷つけることだと、わかってきます。

作る人と食べる人の関係は、表現者と［Y］のようです。いい注7芝居を見たいなら、良い［Y］にならないといけません。ちゃんと食べ物に向き合ってください。一生懸命食べてください。美味しく食べてください。一生懸命食べる姿は尊いと思います。

料理した人が、料理を食べてくれる人を見ると幸せな気分になるものです。一人暮らしでも、自分でお料理して食べてください。そうすれば、いつのまにか、自分を大切にすることができるようになっています。

（中略）

一汁一菜のお味噌汁には、いいお味噌を使ってください。いいお味噌とはきちんと発酵し、昔ながらの製法でよく醸されたものです。一汁一菜を基本にした変化の少ない単調な暮らしをしていると、微妙な変化にも気づけるようになるでしょう。そうなれば、風が吹いても幸せだなと思えるようになるのです。

（一部内容を省略しました）

【土井善晴『一汁一菜でよいと至るまで』】

注1　タブー…ある集団内で、言ったりしたりしてはならないこと。

注2　ハレ…祭りや行事などの非日常のこと。この後に出てくる「ケ」は、「ハレ」に対して日常のこと。

注3　一汁三菜…ご飯に一点の汁物と三点のおかずがつく食事。

注4　メタボ…「メタボリックシンドローム」の略。生活習慣病の前段階の状態。

注5　オートマチック…自動的。

注6　養老孟司…医学者。解剖学者。

注7　芝居…ここでは演劇のこと。

問一　〜〜〜線a「テイアン」、b「オオゼイ」の漢字をふくむものを、次のア〜エからそれぞれ選びなさい。

a
ア　争いをチョウテイする。
イ　彼らはその土地にテイジュウした。
ウ　契約をゼンテイにして話し合う。
エ　太平洋のカイテイを調査する。

b
ア　ジゼイに遅れないようにする。
イ　費用のセイヤクがある。
ウ　原油をセイセイする。
エ　国王にチュウセイを誓う。

問二　［A］〜［C］に当てはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次のア〜エから選びなさい。

	A	B	C
ア	たしかに	ですが	あるいは
イ	もとから	すなわち	したがって
ウ	けっして	なぜなら	ところが
エ	そもそも	つまり	しかし

問三　——線①「栄養学的には一汁三菜が奨励されている」とありますが、「一汁三菜」に関する説明として最も適当なものを、次のア〜エから選びなさい。

ア　昭和五十年代にご飯中心の和食が完成したが、外食の普及により食事が画一化した。

イ　タンパク質やエネルギーを重視するようになり、食事から季節感が失われていった。

ウ　栄養学を取り入れることで、日本料理における主菜と副菜の区別があいまいになった。

エ　伝統的な和食が戦後も進化を重ねる中で、肉や油を取り入れた一汁三菜が成立した。

問四　――線②「プロの料理と家庭料理」について、

(1)　「プロの料理」とはどのような「料理」ですか。三十字以内で説明しなさい。

(2)　「家庭料理」について説明した次の文の［Ⅰ］～［Ⅲ］に当てはまる言葉を、本文中からそれぞれ五字以内でぬき出しなさい。

＊家庭料理とは、［Ⅰ］のもとに作られた家族の［Ⅱ］ものであり、［Ⅲ］のおおもとである。

問五　［X］に当てはまる漢字二字の言葉を、本文のこれより前の部分からぬき出しなさい。

問六　――線③「地球と人間の間に料理があります」とはどういうことですか。その説明として適当でないものを、次のア～エから選びなさい。

ア　食材となる生物の置かれている状況に思いを寄せる。

イ　環境を損なうことが人間も傷つけることを認識する。

ウ　自然破壊を防止するための活動へと向かわせる。

エ　食によって身体が養われることを自覚して行動する。

問七　［Y］（二カ所あります）に当てはまる漢字二字の言葉を、自分で考えて答えなさい。

問八　――線「有限の無限」とはどういうことですか。それが人々に何をもたらすかもふくめて、八十字以内で説明しなさい。

（下書き用）

問九　本文の内容についての説明として適当なものを、次のア～オから二つ選びなさい。

ア　料理をすることによって他者に目を向けるようになり、他者と関わった結果として自分のことも大切にできるようになる。

イ　味噌汁の伝統的な具材の調理法は和食の本質に根差しており、それを受け継ぐことで和食をより発展させることができる。

ウ　料理をする人は、料理を取り巻く状況に苦悩してきたが、料理を食べているだけの人には、その悩みがなかなか理解できない。

エ　従来の料理の研究書は、食事を欲望の問題として捉えているが、それよりも料理の専門家の視点から考察することが重要だ。

オ　日々の食事において、五感を通じて積み重ねられた経験によって得られた知性は、さまざまな場面で応用することができる。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学生の頃、神奈川の野球チームでピッチャーをしていた航太郎は、大阪の山藤学園へ野球推薦での進学を望んでいたが声をかけてもらえず、山藤のライバル校である希望学園に特別特待生として入学した。航太郎は寮に入り、母親の菜々子も航太郎を応援するため、神奈川から大阪へと引っ越した。一年目の夏、航太郎は肘の手術を受けた。その年の暮、航太郎が入寮してから初めて、菜々子は自宅で航太郎とゆっくり過ごせることとなった。

航太郎が入寮して以来、家にいたら見そうな番組ばかり予約をするクセがついている。

「お、すげぇ。なんかいろいろ入ってる。M-1も録ってくれとるんや」

そんなことをつぶやきながらも、航太郎は違う番組にカーソルを合わせた。注1ドラフト会議で指名される可能性のあるアマチュア選手にaミッチャクしたドキュメンタリーだ。まだ小学生だった頃、航太郎はこの手の番組が大好きだった。注2健夫が亡くなってからはあまり見ていた記憶はないが、目についたので一応録画しておいた。

イスの背もたれを抱え込むようにして、航太郎はその番組を見始めた。あらためて背中の大きさに圧倒される。菜々子もイスに腰かけ直し、新しいビールに口をつけながらボンヤリとテレビを見つめた。

しばらくの間、テレビの音だけが聞こえていた。ちょうど指名された高校生が、満面に笑みを滲ませながら両親に感謝を告げている場面が映し出されたときだった。

航太郎がポツリといった。

「いろいろありがとうね、お母さん」

心臓が小さく音を立てる。それを悟られないよう呼吸を整え、菜々子は慎重に尋ねた。

「何が？」

「何も聞かないでくれて。野球部のこと、本当はいっぱい聞きたいはずやのに。あえて聞かないようにしてくれとるんやろ？　他のお母さんたちはしつこいくらいやって言うし。ありがたいなと思って」

「べつに、そんなこと……」と一度は口を閉じかけて、菜々子は自分を奮い立たすように首を横に振った。

「ああ、でも、航太郎。やっぱり一つだけ聞いてもいい？」

「聞くんかい！」と、航太郎は漫才師のように声を上げる。

「まぁ、べつにいいけどね。でも、一つだけやで」

「うん。でも、たぶん一番話しにくいことだと思う。傷つけたらごめんね。あのさ、夏のはじめにあんた外から私に電話してきたのって覚えてる？病院からって言ってた。救急車の音も聞こえてた」

航太郎はなんてことないというふうに肩をすくめる。

「もちろん覚えてるよ」

「そのときに言ったことも？」

「うん。肘が痛いって言ったよね」

「違う。そっちじゃない。もう一つの方――」

菜々子は思わず気色ばんだ。寮に入ってから一度も訪れなかった瞬間だ。①表層をなぞるような時間がようやく終わり、航太郎と心が通い合った。聞き分けのいい母親のフリをするのはもうムリだ。この機会を逃すことはできなかった。

航太郎はボンヤリと菜々子を見つめていた。しらばっくれるという考えも脳裏を過ったに違いない。それでも、逃げずに目を見返した菜々子に何

かを感じ取ったのだろう。しばらくすると、仕方ないというふうに目を細めた。

「やめたいって言ったよね。たしか、あのとき。それも覚えてる」

のどの奥が小さな音を立てる。ずっと尋ねたいと思っていたことだ。七月のあの日、深夜一時を過ぎていた。航太郎から寮に入ってはじめての電話がかかってきた。

ア電話の向こうで航太郎は泣いていた。父を亡くして以来、一度も泣いたことのなかった子が受話器を握りながら泣き声を上げていた。

混乱する菜々子に、航太郎は『もうずっと肘が痛い』と告げてきた。そして、何かを振り切るように言ったのだ。

『俺、もう野球やめたいよ』

あの夜のか細い声がいまでも耳に残っている。あわてて車のキーを握って家を飛び出し、朝が来るまで近郊の総合病院をいくつも回った。しかし航太郎はおろか、bコウシュウ電話を見つけることすらできなかった。

緊急事態だ。寮に駆け込むべきだという気持ちはあった。管理人や監督を叩き起こすべきだという考えも過ったが、菜々子にはできなかった。航太郎に迷惑をかけてしまうと思ったからだ。

そのことに菜々子自身が傷ついた。②自分は航太郎の親であって、高校球児の母親なわけじゃない。そんな当たり前のことを自分自身が否定した。土壇場に至ってなお体裁を気にしている自分自身に失望した。

結局、寮の起床時間からしばらくして、知らない番号から『昨日は取り乱してごめん。ちゃんと帰ってるから大丈夫』というショートメッセージが送られてきた。

持ち主が誰かもわからないその携帯に『とにかく今日中に電話して。そうでなきゃ、本当に寮を訪ねます』という返信を送ったら、その日の昼にはまた違う番号から航太郎は電話をかけてきた。

そのときにはもういつもの航太郎に戻っていた。『本当にごめん。なんかちょっとうまくいかなかっただけだから。心配かけてごめんね、お母さん』というあっけらかんとした声に、菜々子はそれ以上追及できなかった。

思えば、航太郎は昔からそうだった。心の内に立ち入られたくないと思うときほど明るく振る舞う。それを察したら菜々子も深く探らないという暗黙のルールが、いつの間にか母子の間にできていた。

それでいいのだ。それが自分たちの決まりだという気持ちがある一方で、だから自分はダメなのだと自己否定に陥りそうなときもある。

つまり、それは肝心なときに逃げているだけなのだ。問題を航太郎自身に押しつけ、ただその場をやり過ごしているだけ。航太郎が周囲から「いい子」と言われるのは、結局は菜々子のふがいなさから来るものだ。

少なくとも、あの夜の航太郎は普通じゃなかった。そんな事態に至っても心の内に踏み込むことができなかった。いざというときに足がすくむ。胸を張って立ち向かえない。親として無力な自分を突きつけられた。

その菜々子がようやくあの夜のことに触れられた。

「私、あんたからはじめて聞いたんだよ。野球部でもなく、学校でもなくて、野球をやめたいって言ったの、はじめて聞いた。あの日からずっと気になってる」

「だったら普通に聞いてくれたら良かったのに。イ手術のときとか、タイミングはいくらでもあったでしょ」

「タイミングはあったかもしれないけど、あんたにそのつもりがなかったじゃない。私にも勇気がなかった」

「勇気ってなんだよ。べつに俺は隠してるつもりなんてなかったよ。聞かれないのはありがたいと思ってたけど、③聞かれたらちゃんと答えようと

思ってた」
「じゃあ、教えてよ。頼りない母親でごめんね。でも、知りたい。あのとき、あんたに何があったのか」
「うん。まぁ、そうだね――」と小声で言って、航太郎は［A］をゆっくりと引っ込めた。
「お母さん、変な想像してるかもしれないけど、べつにイジメとか、暴力とか、そういうことが理由じゃないよ。もちろん先輩たちに不満はあるし、監督にも腹の立つことばかりだけど、そんなことはどうでもいい。理由の一つは、本当に肘が限界だって感じていたこと。俺って変に意固地なところがあるでしょ？」
「うん。お父さんに似てね」
「いやいや、俺は完全にお母さんに似てるんだと思ってるけど、それはともかく、あの頃は自分のそういう意固地さに勝手に苦しめられてた気がする」と流れるように口にして、航太郎は菜々子の返事を待たずに続けた。
「中学時代に肘の手術をしなかったこと、本当のことをいうとずっと後悔してた。なんであのときに決断できなかったんだろうって」
「そうなの？」と首をひねって、尋ねるべきはそうじゃないと思い直し、菜々子はあわてて質問を変えた。
「どうしてだったの？」
航太郎はやりづらそうに鼻先に触れた。
「それこそ意地になっていたからだと思う。[注3]西湘の大竹監督にも、内田監督にも、ウ自分がやれるっていうことを見せなきゃって思いすぎてた」
「内田監督？」
「うん、山藤のね。肘が痛いんじゃないかって指摘されたことも、意識が低いって注意されたことも、うちに来いって声をかけてくれなかったことも全部悔しくて、なんとか見返したいって思ってた。その結果、勝手に焦ってこのザマだからさ。高校に入ってすぐに肘の痛みは再発してたし、なんとか欺しだましやってたんだけど、こんなんじゃ通用するはずないって誰よりも理解してた。それが本当に情けなくて。エなんか行っちゃったんだよね」
「行った？　どこに？」と尋ねながら、菜々子にはなんとなくその答えがわかった。
「もしかして山藤？」
「うん、治療日に。わざわざ山藤の近くの病院を探して」
「それで？　どうだったの？」
心が逸るのを感じながら、先を促した。航太郎は照れ笑いを浮かべることなく、かすかに唇を噛みしめた。
「それが二つ目の理由かな。かなり傷ついたよ。まだ夏の大会前だったし、だから大ブレークする前だったけど、[注4]原のピッチングを見て度肝を抜かれた。ハッキリいってモノが違った。自分がケガでモタモタしている間に、あいつはとんでもないことになってた。そりゃ内田監督は原を獲るわけだって思ったよ。もっと落ち込んだのは、原以外の一年生のピッチャーも俺よりずっと良かったこと」
航太郎は卑下したような笑みを浮かべ、ちらりと棚の上のデジタル時計に目を向けた。新しい年を迎えるまで、あと十五分ほどだ。
大きく伸びをしながら、航太郎は思わぬことを口にした。
「年が明けたらどこかの灯りの下でキャッチボールしない？　初詣がてら」
「なんでキャッチボールなのよ。まだ焦ってるの？」
「ハハハ。いや、まったく焦ってないよ。たしかに手術してすぐの頃はジ

タバタしてたけど、いまはそんな気持ち全然ない。むしろ逆」
「逆？」
「うん。俺の高校野球は実質一年しかないと思ってる。下級生の間にムリして復帰しようとは思ってない。肘を完全に治した上で、八月の新チームから合流できたらいいなって思ってる。とりあえず焦ってないから心配しないで。キャッチボールしたいのは全然違う理由。俺、手術してから実はまだ一球も投げてないんだよね」
「そうなの？」
意外な思いがした。病院から与えられた復帰プログラムに従うなら、もうとっくにキャッチボールくらいしていていい頃だ。
航太郎はふんと鼻を鳴らす。
「もう焦るのはやめようと思ってたし、だからボールを投げるのは年が明けたくらいからでいいやって考えてた。ホントは注5陽人でも誘おうと思ってたんだけど、お母さんが最初の相手っていうのも悪くないでしょ。昔はよくやってくれたんだし。つき合ってよ」
航太郎は持ち帰ったバッグからグローブを二つ取り出し、その一つを渡してきた。④胸がかすかに弾むのを感じながら、菜々子は流されそうになるのを懸命に拒む。
「わかった。キャッチボールはつき合ってあげる。その代わりもう一個だけ教えて」
「えー、約束が違うじゃん」
航太郎はふてくされた仕草を見せたけれど、菜々子はやっぱり怯まない。むしろこちらの方が本題だ。
「落ち込んだ理由はよくわかった。野球をやめたくなったことにも納得はいく。でも、一つだけわからない。どうしてあんたはたった一晩で立ち直ったの？　⑤あの夜に何があった？」
航太郎はおどけたような笑みを浮かべた。
「そんなのわかってるんじゃないの？」
「何？」
「救急車の音」
「やっぱりそうか」
「あのイヤな音がお父さんのことを思い出させた。お父さんが運ばれた病院のことが猛烈によみがえって、なんだか逆に冷静になった。現実に引き戻された気がしたし、弱音を吐いてる場合じゃないなって思ったんだよね。お父さんのことを思い出した」
デジタル時計が二十三時五十五分を示している。仏壇の健夫を一瞥だけして、航太郎は今度こそ立ち上がった。
「さ、ぼちぼち行こや。おかん」
結局、男の子の親として、自分はまだ健夫に敵わないらしい。そんなことを感じつつ、意外にも菜々子は卑屈な気持ちにならなかった。死んでなお健夫が自分たちを支えてくれている。そう思うことができたのだ。
「ちゃんと暖かくしていきなさいよ。あんたいつも薄着なんだから」
よく「三年」という言葉を耳にするが、実は高校野球をしていられる時期は二年と少ししかない。
甲子園に出場し、そこでも勝ち進み、その先にある注6国体にまで出場するならいざ知らず、七月の地方予選で負けてしまえばわずか二年三ヶ月だ。
最上級生になるまでの期間はさらに短く、一年と三ヶ月。過酷な環境が子どもたちに、あるいはその親にも無間地獄のような長さを感じさせるが、後輩や下級生の親として過ごす時間はそれしかない。
その一年三ヶ月のほとんどを、航太郎はケガとともに過ごすことになった。それでも、何もあきらめていないという。戦い方を変えつつ、真剣に

高校野球に向き合うとcセンゲンした。
父との約束を果たすためだ。
山藤を倒して、甲子園に出場するため。
⑥そのチャンスが残されているだけ、航太郎は、きっと菜々子も幸せだと言えるのだろう。

【早見和真『アルプス席の母』】

注1　ドラフト会議…プロ野球の球団が名簿に登録された選手を指名し、入団交渉権を獲得するための会議。
注2　健夫…菜々子の夫で航太郎の父。
注3　西湘の大竹監督…航太郎が中学時代に所属していた野球チームの監督。
注4　原…航太郎と同じ高校一年生。山藤に推薦で入学した。
注5　陽人…航太郎の同級生でチームメイト。
注6　国体…夏の甲子園での大会で好成績を収めた学校が出場できる大会。

問一　線a～cのカタカナを漢字に直しなさい。

問二　A に当てはまる言葉として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。
ア　出かかった言葉　　イ　流れ落ちそうな涙
ウ　不満そうな表情　　エ　顔に張りついた笑み

問三　線①「表層をなぞるような時間」について説明した次の文の I ～ III に当てはまる言葉を、本文中からそれぞれ指定の字数でぬき出しなさい。
＊航太郎が I（十五字以内） ときに、菜々子は II（六字） ようにすることで III（十五字以内） 状態。

問四　線②「自分は航太郎の親～自分自身が否定した」とはどういうことですか。最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。
ア　自分は親として航太郎のためだけを考えて動くことよりも、野球部全体のことを考え行動してしまっていたということ。
イ　高校野球で活躍できるように支えるのが親の役割なのに、自分は航太郎のために何もしてあげられなかったということ。
ウ　航太郎の高校野球での活動を第一に考えようと思っていたのに、結局は自分の親としての思いを我慢できなかったということ。
エ　航太郎の気持ちや身体のことよりも、野球部での活動に悪い影響を与えないようにすることを優先してしまったということ。

問五　線③「聞かれたらちゃんと答えよう」とありますが、航太郎の「答え」はどのようなものでしたか。「聞かれ」た内容が分かるように八十字以内で答えなさい。

（下書き用）

問六　――線④「胸がかすかに弾むのを～懸命に拒む」とありますが、このときの菜々子の様子を六十字以内で説明しなさい。

問七　――線⑤「あの夜に何があった」とありますが、これに対する航太郎の返事とそれを聞いた菜々子についての説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア　救急車の音を聞いて父のことを思い出し、もう一度頑張る気持ちになったという航太郎の話を聞いて、亡くなった今も健夫が自分たちを支えてくれていると頼もしく思っている。

イ　救急車の音でよみがえった父を亡くした日の記憶を忘れるために野球に打ち込むという航太郎の話を聞いて、これからは自分がしっかりと航太郎を支えていかなければと意気込んでいる。

ウ　救急車の音を聞いて何のために野球をやっているのかを思い出したという航太郎の話を聞いて、健夫が亡くなった後も航太郎に頼りにされていない自分にふがいなさを感じている。

エ　救急車の音を聞いて父のために野球をするという気持ちを思い出したという航太郎の話を聞いて、今も航太郎にとって健夫が自分よりも支えになっていることをはがゆく思っている。

問八　――線⑥「そのチャンスが～言えるのだろう」とありますが、ここでの菜々子についての説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア　意外と短い下級生期間にケガをしたことでほとんど練習ができていなかったが、それでも二人で甲子園出場という夢を叶えなければならないと必死になっている。

イ　下級生である期間のほとんどがケガをした状態だったが、それでも甲子園出場の可能性がないわけではないという状況を少しでも前向きに考えようとしている。

ウ　下級生である厳しい時期にさらにケガという悲劇に見舞われて絶望的な状況から目を背けるために、父と約束した甲子園出場というわずかな可能性に期待している。

エ　ケガをしたのが意外と短い下級生の時期であり、その間も甲子園出場に向けて努力を続けている航太郎を見てきっと夢が叶うはずだと安心している。

問九　――線ア～エを出来事が起こった順に並べかえなさい。

問十　本文についての説明として適当でないものを、次のア～エから選びなさい。

ア　航太郎の答えを菜々子が言い当てたり予想したりしているところから、親子のつながりの強さを感じられる。

イ　航太郎が深刻な話のときと何気ない話のときで異なる言葉づかいをすることで、会話の雰囲気を変化させている。

ウ　航太郎がなかなか質問に答えないときも、菜々子が落ち着いていて話すよう促す様子から母親としての心の広さが伝わる。

エ　最後の質問への返答が終わり、菜々子への呼びかけ方が変わったことで、航太郎の気持ちが切り替わったことが分かる。